



令和元年度 教職員と福祉学習支援者との 交流会



～ 当日の記録 ～



社会福祉法人 川崎市多摩区社会福祉協議会
福祉教育推進委員会

日時：令和元年7月4日（木）14：15～16：30
場所：多摩市民館4階 第1会議室、5階 実習室
当日の参加者：12名

【教職員 8名（小学校 3名、中学校5名）、福祉関係団体 4名】

— 次 第 —

1 開会・趣旨説明



2 第1部

(1) 講話 「福祉教育って?～効果的な福祉学習にするために～」

司会：高木 寛之 氏

川崎市多摩区社会福祉協議会 福祉教育推進委員会 副委員長

山梨県立大学人間福祉学部福祉コミュニティ学科 講師

講師：小山 郁美 氏 川崎市多摩区社会福祉協議会 福祉教育推進委員

手話サークル 山びこ

手話サークル 多摩の会

(2) 福祉用具の説明・体験・・・・・・・・・・教職員

情報交換会・・・・・・・・・・福祉関係団体

3 第2部 交流会

4 まとめ・アナウンス

5 閉会



講話



「福祉教育って？～効果的な福祉学習にするために～」

司会：高木 寛之 氏

川崎市多摩区社会福祉協議会 福祉教育推進委員会副委員長
山梨県立大学人間福祉学部福祉コミュニティ学科 講師

講師：小山 郁美 氏

川崎市多摩区社会福祉協議会 福祉教育推進委員
手話サークル 山びこ
手話サークル 多摩の会

今日は、多摩区内の学校で福祉学習の講師として活動されている、小山さんをパネリストとして呼び出しています。この30分位の時間の中で、今からこの6つの質問をお聞きして、最後にまとめという形にしていきたいと思います。

勤が良い方はお気づきになったかもしれませんが、小山さんの前にはマイクは置かれていません。小山さんには、聴覚の障害があります。そのため、私が話していることは、手話通訳さんを通じて小山さんに伝わり、小山さんの話したことは手話通訳さんを通じて皆さんにマイクで伝えていくという形になります。そのため、やり取りとしては少し時間がかかりますが、よろしくお願いいたします。



大体どのくらいの時間で授業をしていますか？

時間というと私たちは「1時間」というのをよく基準にしますが、学校は1時間目、2時間目という単語を使うときに、60分ではないんですね。その中で、どのくらいの時間を使いながら授業をしているのか、ということについて、まずは教えて下さい。

A 年間を通じて色々な学校に行っていますが、ほとんどの学校で、1時間は45分か50分です。小学校は45分、中学校は50分ですね。小学校では45分の授業を2コマ分続けてやるので、合計90分、2時限分使って授業をすることが多いです。途中で休憩を入れています。



Q では実際に小山さんが学校に行くときというのは、2コマ続きで授業をやることが多いということですね。
ちなみに、小山さんは普段お仕事をされていますよね。結構他の講師の方も、お仕事をされている方は多いと思います。そうすると、仕事をしながら講師をされている中で、どの時間なら休みがとりやすい、とかはあるんですか。

A 私はシフト制の仕事をしていますので、私の場合は仕事先に手話の講師で学校に行くことがあると伝えてあります。ですので、会社から了承を得て、調整していただいています。



Q 先程2コマ連続で授業を行うという風にお話しされていましたが、授業の構成はどう使っているんでしょうか。もしくは、その2コマ以外に、事前学習や事後学習のようなものがあれば、それも含めて教えてください。

A 大体、こんな感じの流れでやります。

聞こえない人はだれ？



聞こえない人とどうやってコミュニケーションをとるの？



こんな時はどうする？



聴覚障がいの人はどうやって生活してるの？



手話をやってみよう！



解説

(小山委員) まず依頼を受けます。それから、事前に学校へ行って、先生と打ち合わせをします。この時に、先生から色々な質問を受けます。または、今は何も考えていないという場合は、当日までに子どもから何か質問や意見を寄せ集めて書いていただき、それを当日までの間に私の方にFAXをいただいて、それを読んでおきます。

そして、当日の流れですが、依頼を受けるのは小学校4年生が多いです。3~4クラスある場合でも全員同じ部屋に集まってもらい、100~150名くらいになります。それに対して手話サークルのメンバーが5~6名で行きます。その内ろう者は2~3名、健常者も2~3名で行って、教えています。例えば最初は、前に5~6人並んで、全員声を出して喋らないようにして、手話だけで自分の名前を表します。すると、子ども達は手話が分からないので、不思議そうな顔をします。前に出ているメンバーが全員手話で自己紹介をした後、司会の人から「この中で誰が聞こえない人だと思いますか?」と聞いてもらいます。そうすると、子ども達は正直なので、一生懸命考えてくれます。正直なので、白髪の人を見ると、高齢に見えることもあるのか、耳が聞こえないんじゃないかと単純に考えます。おじさん、おばあさんは耳が聞こえない、と思っているのでしょうか。大人だと、なかなかそうは言えないと思いますが、子ども達は正直に手を挙げて、そういます。でも、司会の人「小山さんが聞こえないと思う人?」と聞くと、誰も手を挙げません。挙げても数人です。「小山さんは聞こえると思う人?」と聞くと、手がたくさん上がります。やっぱり若いからということもあるのでしょうか。見た目で判断されます。という流れで、見ただけでは「聞こえない」ということが分からない、ということを、説明します。



その後に、手話ではなくて、最初は皆手話を知らないで、手話が分からない状態で、どのようなコミュニケーション方法があるのか、ということを知るために、身振りで伝えるゲームのようなことをします。一つの言葉、例えば、冬に学校に行くことが多いので「雪だるま」という単語だとします。皆さん見てくださいね。

今私は口話（ロパク）で「ゆきだるま」と言ったのですが、皆さん分かりましたか。今は先に伝えていたので分かったかもしれませんが、先に口話（ロパク）だけでやると、口の形だけで読み取ることは難しいので、なかなか伝わりません。

次に空書というものをやります。難しいですよ。空書きとして、空間に指で書きます。今皆さんは「ゆきだるま」だと分かった状態で見てるので、分かるかと思いますが、でも子ども達は、何を書いているのか分からないような表情をされます。その次に、身振りをします。分かりましたか。今、雪だるまを作ってみたのですが。そういう身振り表すと、子ども達はたくさん手を挙げてくれます。そういう形で、手話以外に方法でも、聞こえない人に伝える方法があるということをお話しします。



ありがとうございます。今のお話は、よかった点も含めてのお話しにもなっていたかと思いますが、少しポイントを押さえておきます。

2コマの授業で実際に行くというのがありましたけれども、実はその前の段階で小山さんは、先生方に少し子ども達の様子や、先生方がどうしたいのか、といったことを聞く時間を設けていました。これは学校の先生にとっては結構負担になる時間だとは思いますが、できればやっていただきたい。

福祉教育は、他の教科とは少し違ってしています。例えば、算数や国語というのは国の方から、「1年生の時はこれができるように、2年生になればこれ」というようにステップがしっかり示されますが、福祉教育には特にありません。全国一律のものが無いんです。だからこそ、その地域にいる子ども達がどんなことに興味があるんだろうとか、どんな人たちに会ったことがあるんだろう、といったことを知らないで当事者が入っていても、上手く繋がらないんですね。

そういう意味では、少し大変かもしれませんが、事前に子ども達はどういうことに興味を持っているんだろうか、どんな準備ができているんだろうか、というのを当事者の方達と共有しておくというのは、実はとても大事なことになります。これは福祉教育をやる時の、1つのポイントです。

そして、2つ目です。福祉教育で取り扱う題材ですが、例えば「耳が聞こえない」というマイナスのポイントから入らないことです。小山さんがやっている授業って、「自分達の大変な所を理解してもらおう」という発想の福祉教育ではないですよ。もちろん学年が上がって、例えば高校生くらいになってくると、もっと「大変な所で手伝ってほしい」という所をお互いに知るといいうこともあるかもしれませんが、例えば小学4年生だったら、「大変なことを知ろう」ではなくて、「自分達の日常生活の場面で、繋がれるポイントは何だろう」です。「雪が降ったら雪だるまで遊ぶ」って子ども達にとってはよくあることです。それを使いながら、「じゃあ、耳が聞こえない人、小山さんとどういうふうに繋がっていけばいいんだろうか」と考える。「手話ができなくても、ジェスチャーや空書や口話で繋がることができるんじゃないのかな？」という風に、「手話を覚える」ということを大事にするのではなく、「小山さんと繋がろう」という部分をどういう風に考えていくか。福祉教育は「覚える」よりも「考える」ものですので、「考える」ということを大事にしているというのが、小山さんのやっている授業構成の中での大切なポイントだと思います。



（小山委員）先程伝え忘れてしまったので補足です。今話したゲームですが、「聞こえない人は誰だ？」というのは1限目の最初にやります。それで皆さんに、聞こえる人と聞こえない人の違いは何か、生活の中でどういうところが違うのか、聞こえない人と出会った時にどうするのが良いのか、という話をしながら、皆で学習をしていきます。そして2コマ目は、こちらで子ども達をクラスごとに分けて、そこに聞こえない人が一人ずつ入り、実際に簡単な挨拶等の手話を教えます。

時々先生から、「手話」を教えてほしい、「手話だけを教えて！」という依頼が来ることがあります。でも、それは私たちの思いとは少し異なってしまいます。2時間手話の指導をするだけでは、子ども達はほとんど忘れてしまうと思うんですよ。手話を覚えるだけではなく、「聞こえない人に会ったとき」「聞こえない人がいるとき」にどうするか、を知ってほしい。子ども達は中々聞こえない人と会う機会が無いと思います。でも、私が学校に行くことによって、身近にも聞こえない人がいるということ、を頭の中に入れていただきたい。それを前半でお話することが大切なのかな、と思います。





福祉学習を実際にやってみると、子ども達の反応はどんな感じなのでしょう？その時の子ども達の様子や、終わった後のことも含めて、子ども達からの反応はどんなものだったのか、教えてください。



授業の最後に質疑応答の時間をとりますが、それ以外に福祉学習の事前準備として事前に FAX で質問をいただいたり、当日も授業の途中で質問を受けます。「聞こえなくて困っていることは何ですか」とか、「聞こえないからできないことは何ですか」「聞こえたらやりたいとはなんですか」とか、「聞こえないから、家の中でヘルパーさんみたいな人がずっと一緒にいるんですか」みたいな質問もあつたりします。私は中途失聴なんですけど、以前は聞こえていました。「聞こえていたのに突然聞こえなくなって、悲しくないですか」というような質問があつたりもします。そういったマイナスのイメージの質問が多いです。やはり最初は「聞こえないから可哀想だ」という目で見ている方が多いのではないのでしょうか。「聞こえないことは大変だ」と思っているんだと思います。

後半になると手話の指導をします。その時には、色々な冗談なども含めて楽しい雰囲気の中で指導をします。普通にお喋りをするような感じで授業を進めていくと、段々子ども達の緊張も解れていき、仲良くなれます。そして最後には色々な質問が出るのですが、「好きな色は何ですか」とか「好きな動物は何ですか」「ペットは飼ってますか」「結婚してますか」「何歳？」というように、2コマ目の最後には個人的な質問に変わっていきます。

「聴覚障害者は自分達とは別の人だ」「可哀想な人だ」という思いが、最初は子ども達の中にあるんだと思います。子ども達は「障害者に対してどんな質問をしたらいいだろう」と最初は一生懸命考えてくれます。でも、最後になると、「なんだ、自分と一緒にじゃないか」という風に、友達に聞くような質問と同じようなものになってきます。普通の会話ができるようになり、子ども達の気持ちの変化が見られます。そういった変化は私たちにとって、とても嬉しいことです。



事前準備の段階で質問をお送りする時に、子どもたちの質問が「障害って大変だな、可哀想だな」という、どちらかというとマイナスな質問を書いてしまっても失礼にならないのでしょうか。例えば学校の方で、「そういう風に考えてはいけませんよ」「もっとポジティブな質問にしましょう」という風に、ポジティブな質問だけを送るというのも、やろうと思えばできると思います。しかし実際に子ども達の中には「可哀想だな、大変そうだな」というネガティブな質問もある訳です。子ども達の中にあるこの両方の気持ち、特にネガティブな方の気持ちは、最初に出してもいいものなのでしょうか。

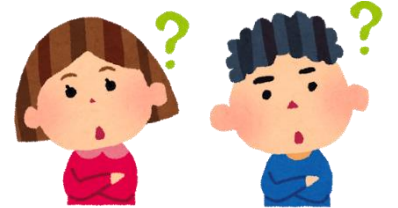


大丈夫だと思います。子ども達は正直にそう思っているんだと思います。それを先生が最初に「失礼だから止めておきなさい」というように言うのは勿体ないと思います。「聞こえないことで、困ることは何か」というのを、最初に知らなければならないと思います。

実際に聞こえる人と聞こえない人には違いがありますよね。その時に、「聞こえないことによる困ることは何か」と考えること、何か疑問を持つこと、それを正直に聞いてくださるというのは、私は構わないと思います。

時々先生が、「失礼な質問ですみません」と書いてくださったりするのですが、そんなことないです。大丈夫だと思います。小学校4年生だと、子ども達なりに頭の中で色々と考えているんだと思います。頭の中で混乱している部分もあると思います。

福祉学習をやる時に、他の障害の勉強もされたいと思います。例えば、聴覚障害の勉強の前に、視覚障害の勉強をしたとします。すると、「聞こえない」「見えない」の違いが、よく分からなくなってしまっているようで、ろう者に対して「点字を使うんですか」といったことを聞かれたりもします。小学校4年生だと10歳ですから、「聞こえないこと」と「見えないこと」が、ごちゃごちゃになっているんだと思います。そういうことを直接私の方に聞かれれば、「いやいや、私は目が見えるから、点字は必要ないんだよ」という話もできます。でも、先生が「失礼だから」と事前にその質問を取り除いてしまうと、子ども達はその疑問を持ったままになってしまうと思います。「見えてるのかな、どうなんだろうな」と、曖昧なままになってしまうと思うので、素直な質問をどんどん受け付けたいと思っています。



Q 子ども達の素直な質問をどんどん受け付けたいというお話でしたが、その他に、小山さんとしてはどのような福祉学習というのが理想的なのでしょうか。こんなのがやれるといいな、と思っていることはありますか。

A あくまで理想ですが、福祉学習は1回だけではなく、何回か繰り返しできればいいと思っています。でも、私ひとりでやるのは中々難しい面もあると思います。他の聴覚障害者もいますが、小学校の授業というのは平日ですよね。そうすると、時間に余裕がある方が対応することになりますので、必然的に高齢者の方になってしまいます。そのため、真夏や真冬は体調面などから難しかったりすることもあるかと思っています。

私は元気ですが、仕事をしていますので、シフトにかかる所はやはり調整が必要になってきます。他にも若いろう者はいるのですが、平日はやはり仕事をしています。他の方が中々参加することができない時に私の方に依頼が来て、結果的に私が全て行くという形になっています。

色々な学校に行きたいと思ってはいるのですが… 90分間の中でできることというのはどうしても限られていますので、限界があります。そのため、できれば前もって事前学習をしていただきたいです。例えば図書館に行って聴覚障害について調べてみる、少し手話を覚えてみる、というのでいいと思います。すごく勉強して、しっかり覚えるというのではなく、なんとなく見て、「ああこういうものがあるんだな」というのを頭の片隅に入れておいていただいて、私に会った時に、「前読んだのと同じだ」ということに気が付いてもらえると、いいなと思います。



最初に何も知らない状態で会うとなると、もう皆さん頭の中が疑問点だらけになってしまうと思います。先生も一緒に事前学習をやっていただくといいと思います。できれば、子ども達と一緒に本を読んでいただく、先生も質問をして、当事者と色々やり取りをしてみたいです。それを、先生と子ども達で共有をすると、いいのではないのでしょうか。

また、授業が終わった後に、いつも子ども達が感想を渡してくれます。それを読むと、子ども達が気づくことはバラバラです。やっぱり「可哀想」「大変そう」と書いている感想もあります。でも、私は今日補聴器をしていないですが、いつもは補聴器をしています。学校に行った時にこれが補聴器なんだと見せると、私の補聴器はピンク色でキラキラしているので、女の子たちが「なにそれ可愛い！自分で作ったの！？」と寄ってきてくれます。「私もピンク好き！」というようなお話しをしたりします。「補聴器が可愛かった」という感想を書いてくれる子もいます。感想は自由だと思います。やはり、可哀想と思う子もいます。1回の授業で、そういった考え



方を変えるのは中々難しいと思います。子ども達の感想というのはそれぞれですし、一人一人を変えていくというのは中々難しいです。しかし、授業が終わった後に、クラスの中で一度福祉学習について振り返って話をして、感想を共有すると、「大変そう、可哀想」という感想を書いた子が、他の友達感想を見て、「なるほど、可哀想ではないのかもしれない」みたいな気づきが出てくるのではないのでしょうか。そのため、できればクラスの中で最後に振り返りをして、それぞれの感想を共有してほしいなと思います。



補足

今の小山さんのお話の中に、いくつかポイントがありました。例えば、複数回学校に行けたら理想的だという話が出てきました。一昨年、いっぱい皆さんに、お話ししていただきました。その時は、何回か学校に来ていただいた福祉学習の事例を基に、そういった福祉学習の時間の取り方というのも紹介させていただきました。これは確かにとてもいい取り組みになるのですが、一方で、先生方も時間を作るのは大変だし、当事者の方達も働いたりしている中で、学校に定期的に行くということは、負担になります。複数回で福祉学習ができれば理想。でも、それが難しいという現状もありますので、これをどう乗り越えていくのかというのが、小中学校での福祉教育の大きな課題になっています。

上手くいっている市町村の事例を見てみると、小学校でやったことを、中学校で深める、という形をとっています。小学校でやったことを、中学校の先生に共有しているんですね。だからこそ中学校の先生は、同じ人と呼んだとしても、小学校でやったことを発展させることができます。

小学校と中学校が上手に連携するというのは、他の科目は大体できていますよね。四則演算ができるからこそ因数分解なんかもできる訳ですから、福祉学習でも同じように、小学校中学校で上手に引継ぎをしていただければ、上手くいくのではないかと思います。

そして、感想の共有ですが、これもとても大事です。子ども達を書いた感想を先生がまとめて当事者にお渡しするっていうのはよくあるパターンですが、ぜひそれを子ども達の中でも共有してみてください。「どんな気持ちになったのかな」というのは道徳の授業で大切にしている所だと思いますが、福祉教育でもそれを大事にしながら進めていただけると、いいと思います。その中で、福祉教育の自由な感想を、大事にしてください。

例えば、この前私も思ったのですが、小山さんの補聴器がすごく派手なんです。補聴器にピアスのようなアクセサリーがついています。そこで、「こんなアクセサリーがついてる補聴器売ってるんですか！？」というお話をしました。そうしたら小山さんが、「自分で作ったんです」と答えました。要するに、私は「耳が聞こえなくて、どのように生活に困っているのか」といった話は一切せずに、「その補聴器はどうやって作ったんですか？」という話の切り口でスタートしました。



話の切り口としてはこんな所でもいい訳ですよ。「何に困っているの?」「何が辛い?」「何が楽しいの?」って言う所から入る子がいてもいいし、そうじゃなくてもいい。今日は視覚障害者の平野さんも来てくれていますが、平野さんは目が見えません。私は、目が見えない人に対して、いつも「今日の服装素敵ですね」と声をかけたりします。「目が見えないのに、どうやって服を決めているのかな」という所からスタートしてもいい訳です。

どんな気持ちからスタートしてもいい、というのが、福祉教育の大事な所になります。色々な気持ちと向き合うというのが、福祉教育のとても大事なポイントになります。例えば、「人に優しくしましょう」といった正解を求めていくものではなくて、自分がそれに対してどういう風に考えるんだろうか、そして、他の人はどういう風に考えていくんだろうか、と考えてほしいと思います。それを、街の中でいきなり聞くっていうのは、難しいですよ。だから、「怖い」ってなってしまう訳です。でも、せっかく福祉教育で当事者に来ていただけると、聞ける訳ですね。子ども達の質問内容によっては失礼になるかもしれませんが、それを受け止めて、それに対して丁寧に答えていただける、もしくはそれに対して「そういうことを聞くのは失礼だよ」と言ってくれる。そんな時間を作ってくれるのが、福祉教育の大事な時間になりますので、ぜひ先生方も当事者の方を呼んだときに、少し失礼になるんじゃないかと恐々とやるのではなく、「子ども達の素直な気持ちはこうなんだけど、受け止めてもらえるかな」なんてことを、考えていただきながら、「一緒に生きる」というのを目指していただければと思います。

福祉教育で大事なのは、「一緒に生きている」ということを、理解することです。何か行動してくださいということを理解してもらうのは、もう少し大きくなってからでいいので、こういう人たちがいて、自分達と一緒に生きているんだ、ということをまず理解する、そういった時間にしていきたいと思います。



Q 最後の一つだけ、小山さんにとって、何か素敵な体験、楽しい体験、どんなことがあったか、というのを聞いて、おしまいにしたいと思います。

A 以前、面白い経験をしました。私は耳が聞こえませんが、私と同じように耳が聞こえない友人何人かと遊園地に行った時に、パンフレットが欲しいと思い、スタッフの方に筆談で「パンフレットをください」とお願いしました。それを受け取ったスタッフの方が、何故か韓国語のパンフレットを私に渡してきたんです。私は韓国語読めないのに、何でだろうと思いました。私が話せないので、外国人だと思われたみたいです。

他にも、電車を乗換する時に、電車を教えてもらおうと思って、駅員さんに筆談で尋ねました。その時に、駅員さんが一生懸命何かの本を調べていました。何を調べているんだろう?と想着いたら、何か外国語辞典のようなものだった、という経験もありました。「聞こえない」ということを言うと、「車いすを準備しますか?」と言われることもあります。私、歩けるんですよ。そういったことを、疑問に思うことはありました。

今のは、大人の話をさせていただきました。でも、多摩区内には小学校がたくさんありますよね。私はここ数年間、色々な学校に行かせていただいています。そこで、子ども達と会う機会も多くなってきました。

たまに道を歩いていると、前に福祉学習をやった時に会った子ども達に会うことがあります。今まで関わった子ども達はたくさんいるので、一人ひとりの顔や名前はあまり覚えていないのですが、子ども達は私の顔を覚えてくれていたりします。そういった時に、子どもが私の方に寄ってきてくれます。でも、どうやって話しかけたらいいんだろうと、戸惑った様子の子もいますが、中には習った手話を覚えていて、手話で「こんにちは」と挨拶してくれる子もいます。または、手話を忘れてしまって、どうやって話しかけようと迷った挙句に、お母さんをお願いして、お母さんがスマートフォンに文字を打って見せてくれ、「前に学校でお世話になったようで、ありがとうございました。」と言ってくれたこともあります。

もし、聞こえない人と会ったことが無ければ、「あ、聞こえないんだ」ということで、近寄ることも無く、遠ざけてしまうのではないのでしょうか。でも、以前に聞こえない人と会ったことがある、という経験があると、前の記憶を引き出して、手話は忘れてしまっても、筆談でコミュニケーションをとることができるんだ、ということ思い出して、実際にコミュニケーションをとってくれる子もいます。例え1回会っただけでも、学んだことを子ども達はきちんと覚えてくれていています。それがとても大切だと思います。私は子ども達に話しかけてもらえると、とても嬉しく思います。

他にも、電車の中で、隣にいた女性が突然、私の肩を叩いてきました。その女性の顔を見たことがあるような気がするけど、誰だっけ？と思っていたら、その女性がスマートフォンに「自分は中学校の教師で、前に福祉学習でお世話になりました」と打ってくれました。先生も子ども達と同じように、勉強してくださって、コミュニケーションの方法を工夫してくれました。授業では、手話での挨拶を教えます。でも、忘れてもいいんです。忘れてしまったなら、スマートフォンでやり取りをしてもいいんです。ただ、聞こえないということで遠ざけてしまう、見て見ぬふりをしてしまう、というのではなく、普通に会ったときに「久しぶり」というやり取りができると嬉しいです。聞こえない人がいるということを、どこか頭の角にでも留めておいていただきたいと思います。



★ まとめ ★

（高木委員長）最後のまとめとして一言。福祉教育と似た科目として、道徳というものがあります。道徳は科目として、国から「こういうことをやりましょう」というものが示されています。そこでは、やはり「心の教育」ということが強く謳われている訳ですが、では福祉教育と何が違うのでしょうか？

今日小山さんがお話ししてくれたように、福祉教育というのは勿論心の教育でもあるのですが、同時に、「〇〇さんと、地域で共に生きていきましょう」という生活の仕方、ということを考えるものでもあります。かなり具体的ですね。だからこそ実際に、福祉教育では当事者の方に来ていただく訳です。福祉教育が上手くいっているからこそ、小山さんを見たときに自分の生き方として、「あっ小山さんだ、挨拶したい」「この前は、ありがとうございましたって伝えたい」と思える訳です。自分の生き方というのをどうしていくのか、というのが「福祉教育」になります。だから、結構具体的な行動も含む訳ですね。こういった所が福祉教育と道徳の、ちょっとした違いになってきます。ぜひ、道徳だけでお終いにするのではなく、また福祉教育だけでお終いにするのではなく、両方を上手く使いながら、「豊かな心」と「それを具体的に体現する生活の仕方」、これを多摩区の中で深めていっていただきたいと思います。

そして、この後ですが、福祉教育でいきなり当事者と会うというのは導入部分としては難しかったりしますので、先生方には導入の事前学習に使えるような福祉用具体験をしていただきたいと思います。体験をしながら、その後もう一度、今日は実際に福祉学習で講師を務めてくださっている方々をお呼びしていますので、「じゃあ学校ではそういうことができるのかな」「こんなことをしてみたいんだけど、いいですか」というお話をする交流の時間をとりたいと思います。

最後に小山さんに拍手を送りたいと思いますが、手話で拍手はどうやるのでしょうか。パチパチしてない拍手というのは、私たちからすると不思議ですね。子ども達もこういうのを、不思議だと思ったり、違和感があるのではないのでしょうか。もしかしたら、盛り上がり欠けるとも思うかもしれない。でも、小山さんから見ると、どうなのでしょう。

（小山さん）私から見ると、とても盛り上がって見えます。

（高木委員長）こういった違いは、楽しめる所ですね。こういうのを是非、大事にしていきたいと思います。本日はありがとうございました。



先生方は、興味のある福祉用具のブースに行って、体験や福祉用具を用いて福祉学習をする際のポイントや注意点を知っていただきました。





先生方が福祉用具の体験をしている間に、普段学校で福祉学習の講師をされている福祉関係団体の方同士で、情報交換を行いました。



学校の先生、福祉関係団体、福祉教育推進委員が各2～3名ずつ、2グループに分かれて自由に交流をしました。



今日色々な立場の方とお話しをして、地域内で色々な活躍をされている当事者の方が出て、講師として呼び出されることを初めて知りました。同学年に支援級の子達もいる中で、どのように福祉学習に取り組んでいけばいいのか、学校内で検討したいと思います。





Bグループ

今まで学校内で福祉学習に取り組んだことが無く、私自身も当事者の方とお会いする機会が無かったので、今日視覚障害や聴覚障害の当事者の方と一緒に話しかけることができ、自分自身驚きや発見がたくさんあり、価値観が変わりました。子ども達にも同じように知ってほしいので、学校内で福祉学習を取り入れたいと感じました。

まとめ



<高木委員長>

2点お話ししたいと思います。1つ目ですが、福祉教育とは、今日がまさにそうだったと思いますが、様々な思いを抱えた人たちとの出会いであるということです。何かを勉強するということは、もちろん大事なことです。それに、行動を起こすということのももちろん大事です。しかし、すぐにはできるとは限らないですね。やはり「怖い」「自分にできるのか不安」「責任が伴うけど自分にまっとうできるかな」と、様々なことを考えてしまいます。だから、行動を起こすことを目標にするのではなく、福祉教育は「人と出会って、その中で色々な価値と出会う」ことです。自分の価値観や、相手が思っていることを考える。

そして、できれば「困ってそう」「可哀想」「怖い」といったマイナスの感情ではなく、好意的な関心からスタートできると思います。例えば、今日小山さんの付けているキラキラの補聴器でもいいですし、グループワークの時に全盲の平野さんはどうやってお煎餅を食べていたか？、または電動車いすや義足も今は見た目がカッコいいのですが…そういった関心でもいいと思います。

そして、なんとなくの好意的な関心からだんだんと、具体的な当事者個人を知っていくといいですね。「目が見えない」「盲導犬ユーザー」を知っている、ではなく、盲導犬ユーザーの「藤田さん」を知っている、です。そして、「藤田さん」を知っている、から、今度は「藤田さんがどういう生活をしているのか」を知っている、になっていきます。「どういう幸せを感じているのかな？」「平野さんの好きな芸能人を知っている、サッカー観戦に行くのが好きなことを知っている」…目が見えないのに、サッカー観戦に行っているんです。どうやって楽しんでいるのでしょうか…また興味関心が出てきますよね。

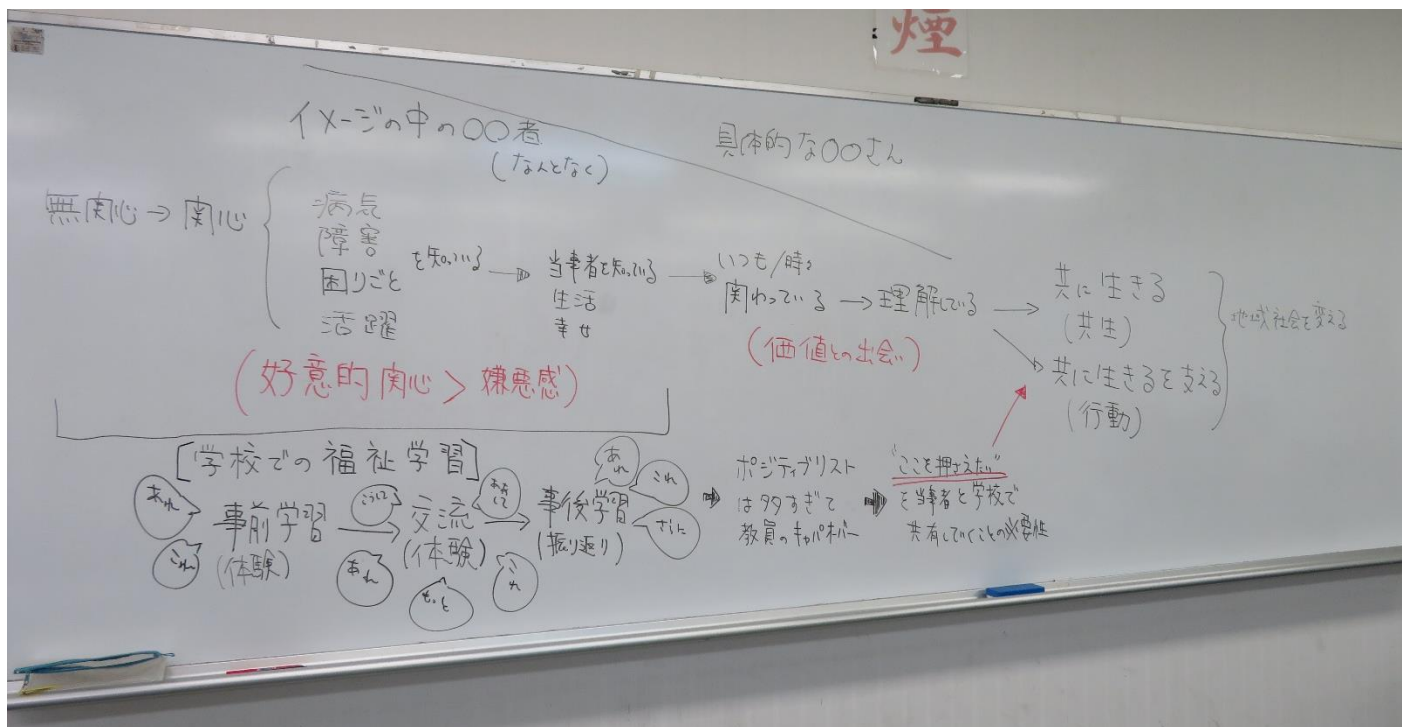
でも、一方で、諦めてしまっていることもある訳ですよ。それを知るというのも、大切です。「幸せになりたい」ということと同時に、「できないから諦めてしまった」ということを知るのも大切です。そして、知るだけではなく、できれば関わっていただきたいと思います。この辺りになると、だんだん価値との出会いが大きくなっていきます。もちろん「知る」というのも価値との出会いですが、関わりを持つことで、更に変わっていきます。

先ほどグループワークの中で、子ども達が特別支援学級の子とたくさん触れ合う中で、だんだんと変わっていったという話をされていました。これは、年に1度の交流だけでは、変わらないと思います。常に関わっている、時々関わっている、関わりがあるからこそ、行動が変わってくる訳です。何故なら、理解しているからです。本人がどういったことが得意で、どういう時に幸せを感じて、どういう時に諦めてしまうのか。そうやって、本人のことを「理解」しているんですね。「障害を持っている人」ではなくて、「〇〇さん」のことを理解している。こういったことをたくさん集めていくと、「支える」ことができるかもしれないし、「共に生きる」ということに繋がるかもしれません。

では、「福祉学習」がどの部分にあたるかというと、前半の部分になります。「実際に困っている人を助ける」という所は、短い時間では中々できないです。では、どこに注目すればいいのかというと、最初の部分になるんですね。「福祉学習」って、教科ではないですよ。だから、全国一律で「これを教えてください」というカリキュラムが無いんですよ。だからこそ先生方は困ってしまう訳ですが、その分予算を付けて自由にアレンジをすることもできる訳です。先ほどのグループワークで、工夫すれば福祉学習として何でもできるかもしれない、と盛り上がっていましたが、本当にその通りです。普通の教科だとできないけれど、福祉学習は教科でない分、自由にアレンジができます。そして、福祉学習をどのように実施していくかというと、事前学習をして交流や体験をやって事後学習という流れがあって、やった方がいいと言われることはたくさんあります。福祉学習以外にも、学校ではやらなければいけないことが、たくさんありますよね。それを全てやるには負担が大きすぎて、先生たちもキャパオーバーですよ。多くの場合、先生方は「福祉」というものを教わっていないですよ。習っていないことをやろうとすると、先生方のキャパを超えてしまいます。更に時間も限られていますよね。なので、頑張れば頑張った分だけ、先生方が潰れていってしまう、というのがここ数年で特に課題となっています。だからこそ、「ここだけは押さえておきたい」というポイントを見つけておくことが、大切だと思います。そのために、講師として呼ぶ当事者の方との事前の打ち合わせが必要なんです。一体どの部分を押さえておきたいのか？服す教育は、やればやるほど、効果は無限大に広がっていきます。でも、それでは先生方が疲れてしまいます。なので、どの部分を子ども達に伝えたいのか？という部分を、明確にしてみてください。

そして、最後に、当事者がいることの大切さです。今日、平野さんがどうやってお菓子を選んでいたのか？当事者がいるからこそ、分かりましたよね。小山さんと一緒に手話通訳がいるからこそ、話し合いがとても穏やかに進んでいました。複数名が同時に話すと、通訳さんが大変ですから、一人一人が気遣いながらお話しされていましたよね。このように、当事者がいるからこそ分かることが、いっぱいあります。福祉学習を実施するときは、当事者の方を呼んで、最後には「〇〇さんを知る」という部分を目指していただければと思います。

それでは、これで終わります。ありがとうございました。



令和元度 教職員と福祉学習支援者との交流会 アンケート

R1.7.4

1 ご自身についてお教えてください。(○を付けてください。)

性 別		年 齢 層						
男性	女性	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代
1 名	2 名	1 名	1 名		2 名	名	1 名	

2 所属をお教えてください。(○を付けてください。)

福祉関係団体 1 名	小・中・高等学校 4 名
---------------	-----------------

3 講義を通じて感じたことや考えたこと、学んだこと、講師や委員へのメッセージなどがありましたら、ご自由にお書きください。

- ・改めて福祉について身近に考え、学ぶことができました。ありがとうございました。(50 代／教職員)
- ・改めて当事者の方とお会いして、お話しすることができて良かったです。(70 代／福祉関係団体)

4 体験を通じて感じたことや考えたこと、学んだこと、委員へのメッセージなどがありましたら、ご自由にお書きください。

- ・車いす体験で初めて乗ってみて、姑にっ悪いことをしたと反省した。こんなに怖い思いをさせていたとは分からなかった。もっと丁寧に押してあげたら良かったと反省している。(50代／教職員)

5 交流会を通じて感じたことや考えたこと、学んだこと、講師や委員へのメッセージなどがありましたら、ご自由にお書きください。

- ・地域で色々な活動があることを初めて知った。上手くマッチングできれば、生徒が持っている力を活かすことができる気がする。(50代／教職員)
- ・無関心から関心をもつところに持っていけるよう、子ども達とも試行錯誤しながら、委員会活動に取り組んでいきたいと思います。本日はありがとうございました。(20代／教職員)

6 今後の交流会でやりたいこと、聞いてみたいといったものがございましたらご自由にお書きください。

7 今回の交流会で良かった点、悪かった点がありましたらご自由にお書きください。

- ・体験、意見交換、まとめの講義があり、有意義な研修でした。(50代／教職員)
- ・せっかくの機会なので、もっとたくさんの参加者がいれればいいと思いました。夏休みに入ったすぐの7月後半にしてはどうでしょうか？また、普段の授業がある時期ならば、下校後の15時意向などがないのではないかと、日時が気になりました。(70代／福祉関係団体)
- ・短い時間でしたが、驚きの多い時間を過ごすことができました。学校に持ち帰り、子ども達にも理解してもらい、地域社会を変えていきたいです。(30代／教職員)
- ・丁寧に話しいただき、本当にありがとうございました。今後とも、よろしくお願いいたします。(20代／教職員)